# 殿板蒙文大藏經考

石濱純太郎

余が今こゝに考へんとする蒙文大藏經とは清朝殿板紅字印本の甘殊爾の事である。然も甚だ遺憾なる事には、余は未だ同書の足本を一閲するの機會を有せず、たゞその殘葉數紙を參考し得るに止まる智識しか持たないものであるが、昨年の秋京都帝國大學文學部の羽田敎授から同藏の番文御序漢字目錄等の寫眞を貸與せらるゝの好情を辱くしたので、今は先生よりの賜物に依つて同藏の內容を窺ひ、推してその原本に幾分なりとも觸れて、以て先生の盛意に酬ひたいと思ふ。

蒙文甘殊爾の飜譯は察哈爾の林丹汗の時に完成し、清の康熙帝によつて校訂刊行されたと云ふ。(一) 蒙漢史書の錄する所は簡單であつてもその大略を知るに足るが、その各甘殊爾自身の內容は確實なる記載を闕いでゐて殆んど分らない。康熙校刊以前のものは寡聞の及ぶ所では、彼の大正十二年東京の劫火で燒失した金字鈔本(二)と、ソヰエト露國レニングラアド大學所藏の古鈔本(三)とであるが、前者は余の性の懶惰によつて未だに手記の整理を懈つてゐるし、後者も提要、目錄を未だに見るを得ない。康熙校刊本は佛國の P. Pelliot 先生によつて巴里へ將來され、露國の B. Vladimircov 先生に

よつて夙に目錄が出來た筈(四)だが、出版は未だらしい。かゝる狀態であるから皆內容が一寸ハツキリしない。因に我が京都帝大へも昨年羽田先生によつて寫本の一藏を將來されたが、余は未だ調査の暇を得ないを遺憾とする。

勿論蒙古甘殊爾の內容だとして紹介された文獻が無いのではない。例へば寺本婉雅師(五)故(六)ポズドネエフ博士の記述の如きもあるが、それがどの本の內容であるのかは一寸分らない。況んや普通には蒙藏は番藏の飜譯だから同じものだと推論して番本の紹介をする。固より蒙藏は番藏を譯したと思はれるが、原本は如何、異同は如何等は一應直接蒙藏によつて研究せられなければならない。たゞ惜むらくは蒙藏の學界に利用せられ得るもの少きと、番藏諸本の調査の完全ならざる爲め研究は頗る難かしい。

偖て羽田先生より余に與へられたる蒙藏漢字目錄は上一より上十七に至る三十二葉で、上五の一葉を闕いでゐる。左右兩端に各々別區劃を設けて題名の所とし、右端には「大藏經總目錄、上或は下某」と題し、左端は普通なら蒙古文題名丁數の有る筈の處だが、こゝは何も書いて無い。此點は康熙番藏が欄外に題名丁數を記せると相違してゐる。次に大題は「如來大藏經總目錄」とあつて番藏と同名になつてゐる。この目錄は元來例により滿蒙藏漢四體の目錄を具備してゐた筈で、嘗て內藤湖南博士が奉天で見られたものには滿蒙藏の三目錄の有つた事を記してゐられるので(七)之を證し得る。

余は先づ此の蒙藏漢字目錄を以て番(八)藏漢字目錄に對照して見た。其の結果を次に列記する。

一、兩目錄は後に記する小異以外は完全に一致してゐる。

イ、その排列が一致してゐる。

ロ、その譯語が全く同じ。

二、祕密經は蒙錄二十五卷であつて增(九)補改版本番錄に合するが、

イ、「婆(十)伽梵聖立髮救度佛母本續於天竺國大班的達吉祥招阿提沙持誦囉領寺所存梵書內布斯端林佈切譯出」は第二十二卷に

ロ、「四部密呪中所集具大攝授呪幷心呪疏及一億師傳名號」は第二十五卷に收められて、通じて卷數を附してある。

三、蒙錄大般若經は十二卷に分攝し十四卷でない。

四、蒙錄諸品經中大般涅槃經は四卷に分ち第四卷內に他三種をも攝入してゐる。

五、蒙錄律師戒行經は十六卷に分攝してゐる。左の通りである。

第一卷より第四卷迄は番錄に同じ。

第五卷

律師戒行品

第六卷

解脫戒本經

分　律　品

第七卷より第九卷迄

分別戒律品

第十卷と第十一卷

比丘尼各各解律經

第十二卷と第十三卷

戒律各各支因體

第十四卷

戒律各各支因二十八品

戒律本序

第十五卷

無上戒律科

微妙戒律科

第十六卷

聖普賢行願王

以下番錄と同じ。

六、蒙錄末尾に「傳賢首宗第三十九代講演比丘寂賢沐□對磨」の識語を有する。この人はよく知らない。

七、一に示した通り蒙錄は番錄と殆んど同一であるからして、櫻部文鏡師が番錄に對して發せられた非難(十一)、卽ち目錄と內容と一致しない事、經名に非るものが經名らしく出てる事、誤解誤譯の有る事等は皆固よりこの蒙錄も受けねばならない。

八、この蒙錄と共に番文蒙藏御序を羽田先生より受けたが、其他に尙ほ何があつたかはよく分らない。この御製序は番藏の番文御序と殆んど同じ結構で文句も大半同一であるが、中に「乃ち已前より今に至る迄爲されざりし蒙古語譯甘殊爾の板を作る」とか、「蒙古語に譯せる舊來の甘殊爾の文を諸大臣に付して新しく興し立てたり」と云ふ文句があつて、終りに「康熙二十三年中秋月二十二日に」と年月日が有る(十二)。この年月日は番藏御序の番文も同じである。

以上の對照の結果から次の推論を下して差支なからう。

一、蒙文藏經は番文藏經と殆んど同時に編纂された。恐らく番藏成稿の前後から着手し、完成は

番藏の補造改版卽ち康熙三十九年よりは後れたであらう。隨つて一に番藏に倣つて編纂し稍々分卷に異同あるのみ。

二、蒙藏漢字目錄は番藏漢字目錄を利用して鈔出したるに過ぎないから使用には注意を要す。

其他の詳しい研究は後考を待つて貰ひたい。況んや他本との比較なんぞは他日の事だ。

終りに臨みてこの珍重なる材料を惠與せられた羽田先生と、番藏利用に對し多大の助力を賜はつた櫻部師とに、深甚なる感謝の意を表す。

註

(一) B. Laufer: Skizze der mongolischen Literatur. Keleti Szemle VIII, 1907., p. 218—9. A. Pozdneev. Mongol'skaja letopis' „Erdenijin eriche." Sanktpeterburg, 1883. p. 303—4. を參照せよ。

(二) 內藤湖南先生、「燒失せる蒙滿文藏經」(讀史叢錄二七五頁以下)を參見せよ。

(三) A. Pozdneev: Lekcii po istorii mongol'skoj literatury, Tom III. Vladivostok, 1908. p. 101. Brokgauz i Efron: Enciklopedičeskij Slovar' Polutom 38 S-Peterburg, 1896. p. 755 a.

(四) P. Pelliot: Notes à propos d'un catalogue du Kanjur. Journal Asiatique XIe Série Tome IV. 1914. p. 112.

(五) 寺本婉雅師、「西藏大藏經總目錄編纂に就て」、佛教史學第三編第五號十六七頁。

(六) A. Pozdneev: Urginskie chutuchty. S. Petersburg, 1880. p.53. Lekcii po istorii. p. 107—22.

(七) 讀史叢錄二八一頁。

（八）如來大藏經總目錄、昭和法寶總目錄第一卷一〇三七頁以下。これに就いては櫻部文鏡師の「如來大藏經總目錄に就て」（宗教研究新第七卷第二號）を參照せよ。余に內藤博士本より轉寫せる一本がある。昭和目錄本は排印原本通りならざる所がある。

（九）櫻部師前揭論文の說による。因にラウフェル氏が西安廣仁寺にて見たるものも增補改版本なるを知る。Laufer : Die Kanjur-Ausgabe des K'aisers K'aug-hsi. Bulletin de l'Académie Impériale des Sciences de St.-Pétersbourg, VI Série Tome III. 1909. p. 567—74.

（十）婆を櫻部師は薄に作る。

（十一）前揭論文一四三—五頁。

（十二）櫻部師の敎ふる所によれば番文は二十二日だが漢文では二十三日となつてゐるこ。番藏の漢文御序は目錄の前に在る。又番文は漢文を譯せるものだこ。

（京都帝大東洋史研究室にて）